

Daily Chronicle

連載 9803 回

流されゆく日々

老人の運転は是か非か



五木寛之

先 日、14歳の少年
が車を盗んで暴走し、事故をおこしたニュースを読んだ。パトカーに追いかけられて、逃走したあげくの事故だったらしい。

高齢者と、少年の交通事故は、どこか共通のものがあるような気がしてならない。

「タクシーのドライバーには、年齢制限がないそ

転手さんが、後期高齢者みたいな感じなので、ヒヤヒヤしました」「でも、若い人より安全運転だったんじゃないの」

「それはそうですが」「ぼくの経験からすると、年配のドライバーのほうが、慎重な運転をするように思えるけどなあ」「でも、髪なんか真白で



PHOTO 石山 貴美子

ヒーをこぼす
らしいなら何で
とかし、ハンド
とつあやまれ
ば、人命にか
かわる事故を
おこしかねな
い。都会の渋
滞のなかで
は、どんなア
クシデントが
おこるか予想
がつかないの
である。
運転能力の格差
である。90歳を過ぎて
も、しつかりした運転を
する人もいれば、60歳あ
たりから認知症の気配が
でてくる人もいる。それ
は各人各様だ。それを画
一的に何歳からの運転は
自重せよ、と上から押し
つけるわけにはいかな
い。また生活権の問題で
もある。

(この項つづく)
—協力・文芸企画

ねえ」といふと、私が運には、日常のことで、なんどなさいことを痛感する。茶碗を返すとか、大事に守るとか、スケジュールを思い違えると過ぎたあたりいろいろ失敗が多かった。題は高齢者間のバスの料金を割引いたり、その他いろんな配慮をして、高齢層にみずから免許を返上させる努力をしているらしい。

地方では、高齢者の免許自ら返上に対し、さまざまな優遇措置をサービスしている自治体があるといふ。

もちろん彼ら有櫛動物門のクラゲたちも網羅され、さらにクラゲを探していく際に出会ったプランクトン類まで550種に及ぶ圧巻の大迫力で紹介される。見入っているうちに、自らも海中に漂つてゐる気分になり、体中の凝りがほぐれていく。水族館のクラゲたちが人気なのも納得。

最近はサラリーマン小説が少ない。恋と生き甲斐探しをモチーフにして働く女子を主人公にした小説はあっても、普通のサラリーマンを主人公にした小説は少ない——と嘆いている読者がいたら、本書をお薦めしたい。主人公は木下勇介。証券会社の営業マンだ。妻が第2子出産のために入院中で、彼はその間、長男の面倒を見なければならない。仕

イクメン証券

セブン・デイズ

セブン・デイズ

町田 哲也著

町田 哲也著

不可思議

ベニクラゲモドキ

どの「十文字クラゲ目」に属するクラゲたちだ。冒頭から、固定概念が打ち壊されるクラゲの登場にびっくりするが、続いてすぐにお馴染みのお椀形をしたミズクラゲやアカクラゲなど「旗口クラゲ目」が紹介され、本物のような「エフライク」を漂うクラゲ世代へと世界を超える大型の「ダウオウクラゲ」、宇宙生物のように長さ15cm以上にもなる無性生殖によって増殖、後者は有性生殖によって相まって神々しさまで感動止まらない。

ウリクラゲなどの「有殻動物門」に分類されるクラゲは、この世代交代がなく、実はクラゲと名前についているが、これまで紹介した「刺胞動物門」のクラゲとは、人間とメダカ以上に生物学的にはかけ離れた生き物なのだ。

吉田内村ドの日